

言葉遊び・歌遊びの世界

藤田芙美子

ここ三回の連載は、初期の音楽行動が現れる一歳前後の子どもたちに注目し、この年齢の子どもたちが、周囲にある音や音声にどのように反応し、自ら音楽的なまとまりのある動作や音声を作り出しているかを明らかにすることを試みてきました。立つこと、歩くこと、言葉を話すことなど、人間として基本的な技能を獲得する画期的な年齢である一歳前後の子どもたちは、心身の発達と

相まって、周囲にある音響を組織づけて音楽的に表現する方法もまた着々と習得していきました。子どもたちは、周囲の人々と関わる中で経験する音響を、自身の呼吸周期ごとに組織づけるという音楽的な行動の構造枠（注）を身につけると同時に、この構造枠にしたがって音響をさまざまに構成することを日々試みていました。周囲にある音響を組織づけようとする行為は、言葉を獲得する以前の喃

語期に既に現われていて、言葉の音響面を形作るために大きな役割を果たしていることも明らかになりました。

子どもたちは、いくつかの言葉を獲得すると、今度はその言葉を音楽的に用いて周囲の人々に働きかけるようになりませんが、さらには言葉の音響面の表現をさまざまに変化させて楽しむようになります。今回は、子どもたちが音楽的な表現を工夫し、楽しむ言葉遊び、歌遊びの事例をとりあげて、それはどのようにして作り出されているのか、その楽しさとは何かを、特に音楽的な側面から考えてみることにしましょう。

否定語による応答

二、三歳になると、子ども同士の言葉による応答場面が急速に増えてきます。この年齢の子どもたちの応答で特に目だつのは、相手の言葉を否定する応答が現れ、これを好んで度々行うようになることです。二、三歳児の否定語による応答唱をとりあげて、子どもたちが否定語の応答を何の手がかりとして作り出しているのかを探っ

てみましょう。

事例1 「危ないよー、危ないよー」

一九八九年七月五日^{注2}

東京の小金井市にある、愛の園保育園の二歳児クラスの子どもたちは、久しぶりに雨があがった園庭で自由な遊びを楽しんでいます。瑛二くん（二歳一〇カ月）と絢子ちゃん（二歳四カ月）は、観察者の一人に助けられてジャングルジムを登り、高さ一メートルほどの所に、約一・五メートルの間隔を置いて向かい合って設置されている木馬の腰掛に座りました。瑛二くんは、高い所に座っているのが少し怖いようで、しっかりと手すりを握り締めています。

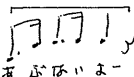
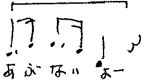
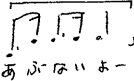
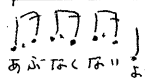
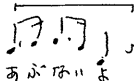
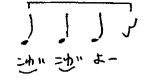
絢子ちゃんの方は、辺りを見回したり、木馬の頭を手で叩いたり、近くを通った保育者



に向かって「見て！」と叫んだり、この場所がとても気に入った様子です。

しばらくすると、砂場で遊んでいた年長クラスの子どもが「水たまりあるからあぶないよー」と何度か叫ぶ声が聞こえてきますが、それを耳にした絢子ちゃんは、瑛二くんに向かって大きな声で「あーぶ・なーい・よー」とリズムカルに叫びました。それに対して瑛二くんは、少し間をおいてから、「あーぶ・なーい・よー」と反復して答えます。この応答を二回繰り返したあと、絢子ちゃんが再び「あーぶ・なーい・よー」と叫びますが、瑛二くんは少し考えてから、「あーぶ・あつく・なーい・よー」と絢子ちゃんの言葉を否定する言葉でリズムカルに答えます。瑛二くんは「あぶなくない」という発音がしにくいようで、口ごもるように言います。このあと瑛二くんが呼びかける側になったり、お互いの言葉のニュアンスを変えてみたり、「こわい・こわい・よー」と言葉を入れ替えたりしながら、二人は、この応答をなんと五十八回、七分間も続けました。二人の応答唱は、

図1 「危ないよー、危なくないよ」

①		
絢子		
瑛二		
②		
絢子		
瑛二		
③		
絢子		
瑛二		

回を重ねるにしたがつて、言語的にも音楽的にも安定し、整ったものになってゆきました。

絢子ちゃんと瑛二くんの応答は、二歳児が、言葉を、音響的、時間的に秩序づけ、その一部を入れ替えて否定語を作り出す過程を良く示しています。絢子ちゃんが「あーぶ・なーい・よー」と叫んだのを聞いて、最初、瑛二くんは、その呼吸の長さに自分の呼吸を合わせて、

「あーぶ・なーい・よー」と反復しました(図1の①)。絢子ちゃんと同じように、ひと呼吸の時間単位を「あぶない」と「よ(お)」の言葉のまとまりで二等分し、さらに音節のまとまりにしたがって「あぶ・ない・よ・お」と下位分割して拍節的に唱えています。応答を繰り返すごとに、二人の息はぴったりと合うようになり、拍節にのった、安定した旋律の応答唱が作り出されるようになります。

このあと、瑛二くんは、絢子ちゃんの「あーぶ・なーい・よー」に対して、「あーぶ・なーく・なーい・よう」と否定する言葉で応答するようになりますが(図1の②)、それは、瑛二くんがそれまでの応答で既に確立している、ひと呼吸の時間単位を四等分する拍節の第二拍目と第三拍目の言葉「ない・よー」を「なく・ない・よー」に入れ替えることによって作り出されるのです。次に瑛二くんは「こわい・こわい・よー」と応答(図1の③)しますが、これもまたその時の瑛二くんの気分にぴったりした言葉を、既に確立している呼吸単位の拍節

に当てはめて作り出したものです。拍節にのって、言葉や音節をまとめたり、分割することを経験する、この種の言葉遊びは、二歳児が、日本語の意味を損なわない言葉や音節のまとまりを探索し、学ぶために格好の機会を用意していると考えるでしょう。

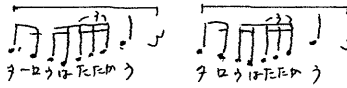
絢子ちゃんと瑛二くんの応答唱は、伝承的な絵描き歌の一節「はっぱかなー、はっぱじゃないよ」を思い起こさせます。この絵描き歌は、否定語による応答であることと、呼吸配分、言葉の分割の仕方など、絢子ちゃんたちの応答と非常に似た構成になっています。伝承的な言葉遊びもまた、子どもたちが絢子ちゃんたちのように、呼吸を合わせ、リズムカルに言葉を唱えるうちに、否定語を組み込んで作り出されたものなのでしょう。


事例2 「タロウは戦う、タロウは戦わない」


一九九一年七月二十二日^{注3}

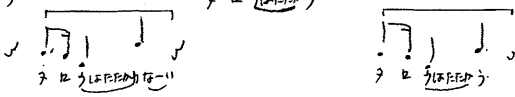
朝のお集りのあと、こひつじ保育園三歳児クラスの子どもたちは、涼しい東側のテラスで粘土遊びをすること


図2 「タロウは戦う、タロウは戦わない」


① 直樹 

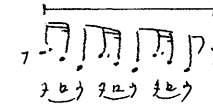
② 佳裕 

③ 直樹 

佳裕 

直樹 

佳裕 

直樹 

になりました。テーブルの上に板を敷いて、子どもたちは思い思いの粘土づくりをしています。直樹くん（三歳五カ月）は、粘土をこねているうちに、どんな形が変わるので、それを見ながら作るものもどんどん変えていくようです。最初は細長い粘土に作り上げて「へびだー」と向かい側の席の佳裕くん（三歳十一カ月）に見せました。それを見た佳裕くんは、自分も粘土を細長くして「へびだー」と叫びます。二人は、互いに関わり合いながら粘土づくりに熱中しますが、そのうち直樹くんは、怪獣づくりに転じます。そして次には、アニメの主題歌「ウルトラマンタロウ」の旋律の断片を鼻歌で歌いながら、ウルトラマン作りに挑戦し始めました。しばらくして、佳裕くんが、ウルトラマンらしきものを作り上げると、それを見た直樹くんは、粘土をこねる手を休めて、何かを思い出すよ

うな、うっとりとした表情で「タロウはたたか・うー」

「タロウはたたか・うー」と二回繰り返して歌いました

(図2の①)。旋律はやや一本調子ですが、リズムは、

原曲の「ウルトラマンタロウ」の通り、正確に歌っています。佳裕くんも歌い始めました。「ターロウはたたかわ・ない」(図2の②)。直樹くんは呼吸を合わせて、呼応するリズムで歌います。二人は、この応答唱を四回続け、最後を直樹くんが「タロウ、タロウ、タロウ」と歌って完結しました(図2の③)。

子どもたちは、三歳頃になると、テレビのアニメ主題歌を頻繁に歌うようになりますが、一般的には、まだ、その断片を一本調子に歌うにすぎません。しかし、リズムは驚くほど正確にとらえています。子どもたちが既成の歌を、旋律よりもまず、リズムを正しく歌えるようになるのは、彼等が、既成の歌もまた、事例1の応答唱と同じように、呼吸を調節し、歌詞のフレーズや単語、そして音節のまとまりを時間的に組織づけることを手がか

りにして歌うからに他ならないのです。

不思議な七五調の唱え言葉

二歳、三歳の子どもたちは、言葉の意味を成さないが、七音節、五音節のまとまりがあるという不思議な唱え言葉を作り出します。

事例3 「わいたくかみで、えいぱくまー」

一九八九年五月二十四日

さわやかな五月の朝、愛の園保育園二歳児クラスの子どもたちは、近くの公園に出かけました。佳奈ちゃん(二歳六カ月)と瑛二くん(二歳八カ月)は、砂場で、ケーキ作りに余念がありません。両手で砂を掬っては、コップに入れ、そのあと、手のひらで叩いて固めます。これを逆さにしてコップを外すと見事なケーキが出来上がります。しばらく遊んだあと、佳奈ちゃんは、砂を詰めたんだコップを片手に持って、滑り台の方へ駆けてゆきました。そして、右手にコップを持ち、左手で手すり

を握って、やっとの思いで階段を登りきりました。コップを持って階段を登るのが大変なことに気がついたのでしよう、佳奈ちゃんは、コップをそこに置くと、そのまま手ぶらで滑り降りました。二回目は、佳奈ちゃんに続いて、瑛二くんも砂を詰め込んだコップを持って階段を登りました。佳奈ちゃんは、階段を登り終わるやいなや、置いてあったコップを手にとり、砂がこぼれないように右手でとんとんと叩いてから、砂場の方向の手すりの上に置きました。そしてこのコップを大事そうに両手で支えて、遠くに向かって大きな声で叫びました。「わいたくかみで、えいばくまー」。一音節ごとに首を前に振って調子をとっています。やはりコップを手すりに置いて、佳奈ちゃんと並んだ瑛二くんは、すぐにそれを真似ようとして、小さな声で「えいばくばくと」とつぶやきました。すると佳奈ちゃんは、瑛二くんの方を向いて「あっちいつて」（あっちに向かってという意味らしい）と、遠くを指差したあと、「あいたらばかい」て言っていると模範を示しました。すると瑛二くんは、「あいかもも

りたー」と、佳奈ちゃんの発声と同じ呼吸の長さで、しかし、二拍目以降の音節を変えて大きな声で唱えます。それに続けて佳奈ちゃんは「おいがだぼがだー」と答えて、一連の応答を完結しました（図3参照）。

佳奈ちゃんと、瑛二くんの応答は、まったく意味を成さない言葉でのやりとりであるために、一見したところ、コミュニケーションの成り立たない、でたらのめの応答のように見えますが、二人の応答を音楽的な面からみますと、そこには見事な

図3 「わいたくかみで、えいばくまー」

佳奈
わりたくかみで えいばくまー

佳奈
あいたうぼかい (2112)

瑛二
あいかももりた おりがだぼがだ

音響構成と、コミュニケーションが成立していることに気が付きます。佳奈ちゃんも、瑛二くんも、ひと呼吸を八等分する七音節、あるいは五音節でまとめています。

二人は、口調の良い唱え言葉、すなわち、お互いの呼吸を合わせ、リズムカルに発声するという行為によって、一緒に作った砂の詰まったコップを持って、苦労して滑り台の階段を登り、こんな高い所までやってきたという、共有する嬉しさ、誇らしさを、伝え合い、分かち合っているのです。

何故、七音節、五音節にまとめるのか、については、もっと数多くの事例について、さらに詳しく調査する必要がありますが、この年齢の子どもが、周囲の音響のまとまりに、ひととき敏感であることから考えて、子どもの周囲に豊富にある唱え言葉やわらべ歌、そして童謡に支配的な七五調の音のまとまりを既に身につけているからではないかと思われまます。私は、音楽的なコミュニケーションとは、このように、人が他者と呼吸を合わせて、音響的に意味のあるあり方で声を音を組織づけるこ

とによって、お互いの気持ちを伝え合い、分かち合うことに他ならないと考えています。

替え歌

四、五歳児は、替え歌を作ることが大好きです。わらべ歌、童謡、アニメの主題歌、どんな種類の歌でも、言葉を入れ替えて、替え歌にします。私達の調査期間中にも、子どもたちは、「あんたがたどこさ」、「お正月」、クレヨンしんちゃんの「おらは人気もの」などの替え歌を作り出しました。

事例4 クレヨンしんちゃんの

「オラは人気もの」の替え歌

一九九三年八月二十七日^{注4}

こひつじ保育園五歳児クラスの子どもたちが全員で「演し物ごっこ」をしています。子どもたちはグループで、あるいは一人で、皆の前に出て、アニメの主題歌「美少女戦士セーラームーンR」、山本リンダの「どう

にもとまらない」、アニメ・クレヨンしんちゃんの主題歌「オラは人気もの」と、歌い進めます。このあと、ゆうたくん（五歳〇カ月）は、他の子どもたちから「クレヨンしんちゃんの替え歌を歌って」とはやし立てられて、この歌をサツカー・Jリーグの歌に見事に作り替えて歌いました。括弧の中には、新しく作り出された歌詞です。

「パワフル、パワフル、パワフル、ぜんかい／なーあ、みさえ・（ひろし・ー）／いちにち・げんきだゾ・ー、しんのすけ！（ひろし！）／ナン・パをするなら・ー（なが・らくおまたせ・ー）／まか・せーておくれよ・ー（歌わず）／さん・にんもよにんも・ー（ひやく・にんもせんにも・ー）／おし・がかんじん・ー／カモンベイビィ・カモンベイビィ（カモンヴェルディ・カモンヴェルディ）／たまねぎ・たべれる・ー（かわさき・おおさか・ー）／そーんなめーして・みつめちゃテれるぜ（テレない）／ぞーさん・ぞーさん・オラは（カズは）／にんきもの・ー（もえている・ー）パニック・



パニック・パニック、みんなが／あわててる・ー（あいしてる・ー）／オーラはすごいぞ・てんさいてきだぞ（てんさいてきじゃない）／しようらい・たのしみだ・ー（たのしみじゃない）」

ゆうたくんは、原曲の歌詞のフレーズ（すなわち、ひと呼吸で歌う歌詞のまとまり）単位に、あるいは、拍節単位に、言葉の入れ替えを行って替え歌を作っていることがわかります。ここでも子どもたちが呼吸単位に言葉組織づけていることが明らかです。そして、五歳児もまた、否定語による言葉の変形を楽しむことが「テレない」「てんさいてきじゃない」「たのしみじゃない」という歌い替えに現われています。

幼児期の子どもたちが、どのように言葉あそび、歌遊びを工夫して作り出しているのかについて、四つの事例をとりあげて、その音楽的側面を中心に、分析、考察を行いました。四つの事例に共通して言えることは、この年齢の子どもたちの言葉あそび、歌遊びが、呼吸単位に言葉の音響面を組織づけるという、音楽的な行為に基づいているということです。ここにとりあげた否定語による応答、七五調の唱え言葉、替え歌は、広大な言葉遊び、歌遊びの世界の、ほんの一部であり、その入口を示すものに過ぎませんが、数ある伝承的な言葉遊びの多くが、口調の良さを楽しむものであることから考えると、言葉遊びとは、子どもにとっても、大人にとっても、基本的に、言葉を音楽的に組織づける探索遊びなのではないかと考えさせられます。言葉遊び、歌遊びを、それが作り出された文化における人々の音楽づくりの方法との関係においてとらえるとき、その広がりつつながり、そして楽しさの本来の姿を、これまで以上に知ることが出来るに違いありません。

(国立音楽大学)

注

1 日本の子どもたちの音楽行動に見られる。呼吸単位に音響を組織づける方法を、私は「音楽的表現の形式」と呼んでいます。本連載四月号参照

2 筆者と国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究グループが、東京都小金井市にある、愛の園保育園において、一九八九年に行った二歳児クラスの子どもたちの音楽行動の研究の資料に基づくものです。筆者と国立音楽大学幼児教育専攻四年の鈴木規永他三名が観察を行いました。

3 筆者と国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究グループが、東京都東和市にある、こひつじ保育園において、一九九一年に行った三歳児クラスの子どもたちの音楽行動の研究の資料に基づくものです。筆者と国立音楽大学幼児教育専攻四年の西浦志津他二名が観察を行いました。

4 前述のこひつじ保育園で、一九九三年に行った三歳児クラスの子どもたちの音楽行動の研究の資料に基づくものです。筆者と国立音楽大学幼児教育専攻四年の松井久美他一名が観察を行いました。